

平成26年度第4回「新潟市子ども・子育て会議」委員意見概要

資料 2

(平成26年10月30日開催 ※会議前・会議後の意見を含みます)

前回素案 ページ数	意見 番号	委員意見概要	事務局対応
1	1	○本文中、9行目「本市も様々な取り組みを行ってきました」を「本市も様々な取り組みを行ってきました」(表1 少子化対策に関する国・新潟市における主な取り組み 表〇〇主な子ども・子育て支援施策の取り組み状況)にする。	○ご意見のとおり修正しました。
1	2	○本文中、18行目「この法律に基づき」を「これらの法律に基づき」にする。	○ご意見のとおり修正しました。
2	3	○2頁の表に例えば「表1 少子化対策に関する国・新潟市における主な取り組み」のような表題をつける。以下の頁についても同様に網掛け欄やコラム欄等に図表番号・表題を通し番号で記載し、目次のあとにこれらの一覧を載せ一瞥性を高める。	○1章、2章について、ご意見のとおり修正しました。 3章、4章についても、今後ご意見のとおり修正します。
3	4	○本文中、下から4行目「位置づけられます」を「位置づけられます(表2 計画の位置づけ)」にする。	○ご意見のとおり修正しました。
4	5	○計画の位置づけの図について、新しい新潟市の総合計画には、議会として、あらゆる政策が少子化対策に繋がる様に策定を求めている。その意味では、国の少子化危機突破のための緊急対策は、直接「子ども・子育て支援事業計画」や「その他新潟市行政計画」に影響を与える。よって、平成31年までの長期計画である事を鑑み、その3つを矢印で繋ぐことを求める。 【参考:総合計画特別委意見集約より関連部分】 ○人口減少時代を迎えるに当たり、定住人口をふやすための総合的な施策、都市計画が必要である。財源と権限、英知を結集し検討すべき。 ○子育て支援は、全庁横断的に対応し、統括する部局の立ち上げを検討するなど、少子化対策・子育て支援施策を一体的に推し進め、コーディネート機能を併せ持つ組織の構築を図るべき。	○計画の位置づけの図については、直接の根拠などを示しているものとして整理しております。本市の総合計画において、少子化対策は重要課題と考えられますが、国の少子化危機突破のための緊急対策を根拠にするものではないので、当図は前回案のままとしました。
5	6	○表題にコラム1を追加する。	○ご意見のとおり修正しました。
8	7	○本市の「少子・超高齢化」については、「超少子化・超高齢化」として、少子化のスピードが極めて危険水域に達したことを示すべきである。	○「人口学では合計特殊出生率1.30を切った国を超少子化国と呼ぶことがある」(平成17年版 少子化社会白書)とのことです。本市の場合、1.30を切っていないため、前回案のままとしました。
13	8	○6歳未満の子どもがいる「核家族」と、「3世代世帯」を、第2軸に写し、6歳未満の子どもがいる核家族数対核家族世帯全体数、6歳未満の子どもがいる3世代世帯数対3世代世帯全体数の割合表記に変更しないと、その意味が伝わりにくい。	○ご意見を勘案し、別紙のとおり、別案を作成しました。

前回素案 ページ数	意見 番号	委員意見概要	事務局対応
19	8	<p>○子ども・子育てを取り巻くさまざまな状況が伝えられている中で、子どもの意識について、小学5、6年生の調査の結果があるが、ほかのいろいろな指標が、主に保護者が置かれている状況や保護者に対する直接的な意識調査であるものに対して、小学5、6年生のみに限定したデータであるというはすごく違和感がある。例えば自分にはよいところがあると答えた子どもの両親がいきいきと仕事なり、家庭なり充実した暮らしを送っているからこういう結果になるとか関連づけたデータであればなるほどと思うが、これだけだと、ここにあることの意味が分かりづらいのではないかと。もしどうしてもこれを記載するのであれば、第3章の、これまでの取組みと成果が載せてあるところに掲載したほうがよいのではないかと。</p>	<p>○ご意見(No.8～24)を勘案し、修正しました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・旧19ページ、子どもの意識と子育てに関する意識の記載順序を入れ替えました。 ・子どもの意識について、ほかに適切なデータがなかったため、データは前回のままとし、本文の記載を追加しました。 ・91ページ第4章の指標についても、同様に前回のままとしました。31年度の数値は、本項目が調査開始された23年度から25年度までの上昇数を考慮し80.0%としました。
19,91	9	<p>○自分にはよいところがあるという部分について、第4章では成果指標として上げていこうということであるが、教育に関係するところで、例えば道徳の時間なりで、自分のよいところ、要するに教育の力によってここは育むことができるというか、全体的に上げることができるものであるということ、例えば親御さんに生活しやすいかどうかということは、それはご自身の感覚で、意図的にデータをあげる、育むことができないようなことが、この部分については教育に関して、かなり教育の介入があれば、極端にいえば上がってくるのではないかと。平成23年からのデータが出ていますけれども、取組みはあるのだと思う。そう考えると、それほど変わらないのではないかと。教育的な介入が必要なのではないかと、学校教育の場での介入は効いてくる部分ではないかと考える。</p>	
19	10	<p>○学校現場にとっては、例えば自分にはどういうところがあるという、こういう設問は学校にしてみればとても大事なデータになる。大ざっぱなことをいうと、自己肯定感のようなもの、やはり学力や家庭状況で相関性がある。ただ、今ここで議論しているレベルでは、学校での成果と家庭での成果と、家庭の部分が数値としてうまく表せるかどうかということについては微妙な部分があるのではないかと感じる。</p>	
19	11	<p>○図表を見たときに、新潟というのはすごく高いなと思った。いろいろな場面でよいところがあるかとか、自分に自信があるかと聞くと非常に低いので、自分にいいところがあるという部分では平成23年度、小学5年生で32.9パーセントから平成25年はずっと上がってきていると、新潟の子どもはこうなのだということが分かるという意味でも、このページは意味があり、こういった気持ちをずっと育んでいけるために大人たちも一生懸命やっつけていかなければいけないという気持ちにもなるのだと思う。</p>	

前回素案 ページ数	意見 番号	委員意見概要	事務局対応
19,91	12	<p>○平成23年度の小学校5年生が、自分によいところがあるが32.9パーセント、平成24年になると小学6年生になっているが、6年生になると28.9パーセントに下がる。同じように平成24年度、5年生が32.5パーセントで、平成25年度の6年生になるとまた2パーセント落ちている。同様の現象が、将来夢やつきたい仕事があるや、ほかのデータでも、5年生から6年生にあがると、もちろんデータの母体が違って来るからずれるという可能性も考えたのですが、すべてのデータにこれが適用されると、大人になるというのはそういうことなのかなと思ったり、いろいろと疑問符が出てしまう。このデータを解釈したときに、年々、子どもたちが自分のよいところがなくなっていっている現状を示したデータだと思って見ると、このデータの趣旨が恐ろしい内容に思えるが、その点をどう理解したらいいか。</p>	
19,91	13	<p>○(意見No.12を受けて)一般論で、まさにこれが大人になるということなのかと委員から発言があったが、小学校5年、6年、例えば4年、5年、6年、中1、中2くらいからと少し広げてみても、ものすごく微妙で、精神的な成長も含めて、思春期ということも含めた時期だが、一般的に、例えば5年生にこういう質問をして、同じ子に聞いても、6年生になったときに、5年生のときにいい加減に答えたいわけではないけれども、6年生になったときに精神的な成長から自分を見つめ直す姿勢というものが変わることによって、今、まさにみの委員がおっしゃったとおり、1学年上がると数字がダウンするということはないだろうか。</p>	
19,91	14	<p>○(意見No.13を受けて)一般論的に言うと、これはあくまでも自己評価なので、アンケートをしたときの前後がないが、前がどのような状況であったか、例えばほかのことで何かあったかどうかという、いろいろな部分でも微妙に影響されていると思うが、大ざっぱに言うと、成長することによって、自己評価が厳しくなるという部分はいろいろなことを学ぶことによって、自分に対しての評価の基準が厳しくなってくるだろうという部分を、いろいろなアンケートで感じる。これは部分的に見ているので、もう少し全体的に見たときにはどういう傾向になっているのかとか、例えば小学5年、6年、中1といくのですけれども、中学校へ行ってキャリア教育などがそこで行われたときに、小学校のキャリア教育はやっていますけれども、ここだけ見ると少し下がっている部分がどういう曲線になっていくのかということもあると思う。もう一つだけ言うと、私を感じることは、今、量的な部分で、漠然とした設問で、何パーセントということで見ているのだけれども、量的な部分と質的な部分、詳しく見ていこうとするとそういうこともあるのではないかと感じている。</p>	

前回素案 ページ数	意見 番号	委員意見概要	事務局対応
19,91	15	<p>○ここまで確認すると、先ほどの論点であるこれを指標というか一つの基準として考えたときに、数値が下がっていくほうが大人になるということになり、下がるほうがいいことになる。しかしやはり私は上がったほうがいいと心のどこかで思っている部分があって、指標として非常に不確定な、下がるほうがいいのか、上がるほうがいいのか分からないようなものを指標にして、その数値が上がったらからいいとか悪いという話をされると、この話はどこに向かっていっているのでしょうかと思う。もう少し相対的なエッセンスをもう一度入れ直されたほうが、指標として使うのであればいいだろう。一つの結果がこうであるということであれば、全体的によい方向になっているという様子は見えるのですが、大人になると変わってしまうという不確定要素が入った時点で、指標としてはどうか。</p>	
19,91	16	<p>○自分にはよいところがあるとか、友達のよいところを見つけるといのは、子どもが受け止めていることとして、調査としては保護者への調査と違うところがあるかもしれないが、せっかく私たちがこうやって、子どもをメインと位置づけた内容を話し合っ取り組んできても、自分にはよいところがないと、高校生、中学生の多感なときに自己否定をして自ら命を絶ってしまうようなことも見受けられるので、いろいろな視点があるが、この3項目というのは、生きていくうえでの基本的なものではないかと、今、一連の意見を聞いて感じた。私たちが育てやすい環境、子どもたちの育ちやすい環境というものを考える中で、継続してアンケート調査をしていってほしいと思うし、私たちはその結果をきちんと踏まえて対処していかなければならないと思う。</p>	
19	17	<p>○二つ提案がある。一つは、先ほど委員意見(No.11)があったように、自分によいところがあるという数字がほかのものと比べて非常に高いというお話がありましたので、一つは比較の対象、県ですとか、低いものを載せるということが一つあるのではないかと思います。最初に委員から、少し唐突な感じがするというお話(No.8)があったのですが、それについての思ったことと、先ほど委員のお話(No.10)、5年と6年でという関連で言うと、子どもの意識の下の6行の本文の書き方が、「平成25年度は平成23年度より」という書き方をしているので、そこを少し工夫した書き方をして、データがもしあるのであれば、ほかよりも高い数字になっていますというような工夫をする手もあるのではないかと個人的に考えました。そのときに、唐突感ですけれども、本文の中に、子どもはどう考えているのでしょうかという形を、ほんの一言でもいいので、たしかに事務局から話があったように、子育て支援ということだけではなく、子ども・子育て支援の会議なわけで、子どもの視点というのをぜひ入れたいという事務局の考えも分かるので、本文も工夫することいいのかもしれない。</p>	

前回素案 ページ数	意見 番号	委員意見概要	事務局対応
19	18	<p>○委員意見No.17に賛同する部分が多い。その前に、自分にはよいところがあるというところに関して、同じようなことが一番下の、将来の夢やつきたい仕事がある。これについてもほぼ同じことが言える。これは単に数字を数量的に見るだけでは意味がないわけで、5年生から6年生という1学年の変化がある。昨今は大学生になっても将来の夢や何の仕事に就きたいかがなかなか分からない学生が多い。対して保育園、幼稚園になると、3歳、4歳、5歳で、わずか1年で本当に大きな変化というか進歩がある。それだけたくさんの情報を入手できたということ。同じように5年生から6年生の1学年の間でもいろいろな情報を入手することによって判断が違ってくるわけなので、数値だけ見れば同じように下がっている。4番の子どもの意識・子育てに関する意識といったせつかくいいものを掲載するのであれば、先ほどN0.17委員意見もあったように、何か比較が可能なデータ、あるいは単に数値だけではなくて、これがより具体的に分かるような子どもの生の声みたいなのを掲載するか、あるいは見方に関して少しコメント、質の部分でこのようなことが言えるとか、こんなふうと考えられるといったポイントが必要なのではないか。しかしながら、資料としては新潟市生活・学習意識調査からとってきたものだということで、別なところからとってきたという感じがするので、このままでは無理があるのではないかという感じもするので、子どもの意識を掲載することには賛成だが、もう少しここに何か加えていただきたい。</p>	
19,91	19	<p>○今、議論されている内容が、第4章の91ページのところに反映されてくるが、成果指標としてこれを数字で表しているものかどうかということ。子どもの成長にあわせて対応が変わってくる、また時代背景で自分自身の評価が変わってくるということであれば、上がる方がいいのか、下がる方がいいのかということも議論にもなってしまうので、もっと分かりやすい指標でこの部分を記載できるようになればいいのではないか。先ほど、教育委員会のほうから、学力の相関を見ているということであった。例えば自己肯定感がある子どもは学力が高い、そうではない子は低いと。学力ということを見れば、それを数値にするというのは非常に分かりやすい。全国学力調査で数値を上げるといっては非常に分かりやすいので、この部分について、相関部分のデータの基になるもので評価を出していく、目標値を決めるというのは非常に難しいだろうと思う。この施策分野1の割合を増加させるのか、下げるのか、このままでいいとするのかということを決めたほうがいいのではないか。</p>	

前回素案 ページ数	意見 番号	委員意見概要	事務局対応
19,91	20	<p>○19ページの表の見方というのはさまざまな見方があるかと思う。21ページで、子育てについて感じるということ、「不安を感じる」とか「負担を感じる」という保護者が小学生になると増えている。親が負担を感じる部分が増えているという中で、子どもたちは一体どうなのかといったところでも、よいところがあるとか、すごく前向きな結果があるというのは、この表というのは、私は見ている意味があるなど思った。もし私がこの表を使って皆さま何かをお伝えするという場面があったとしたら、まず新潟市の子どもたちの現状はこうですよということ、新潟市での子ども・子育て会議の中でいろいろな意見が交わされ、支援計画の中に、ページでいいますと、26ページにあります基本方針で、一番下の部分、「こうした子どもの段階や個人差に留意し、一人ひとりが、かけがえのない個性」ということで、大人たちみんな「そのすこやかな育ちを等しく保障する施策を推進します」と書かれているように、せっかく今このような気持ちでいる子どもたちを支援して伸ばしていくことをみんなで考えていくためにはとても重要な気がする。事務局から話がありましたように、大人だけの意見ではなく、ここに子どもの意見が入るといことはとても意味があると思う。</p>	
19	21	<p>○確かに小学5年生、次の年の6年生を見ると、つながってはいるのだけれども、下がっているのだけれども、下がった6年生を見ると上がっている。そういうところにも着目するような書き方や、あるいは子育てに関するところから言えば、今は表題が子ども意識・子育てに関する意識となっているが、逆にして、子育てに関する意識・子どもの意識とすると、受け止めたときの印象が違う。</p>	
19,91	22	<p>○第4章の施設分野ごとの成果指標のところでは、この資料をどうするかというところの意見だが、ぜひ入れて、大人になると下がるという話もあったが、大人になって客観視できても、高くなったほうが絶対にいいと思うので、これはこのまま指標として入れるべき。</p>	
19	23	<p>○子どもの意識(小学5,6年)のデータは、他に説得力のあるデータがあれば替えたほうがよい。</p>	

前回素案 ページ数	意見 番号	委員意見概要	事務局対応
19	24	<p>○子どもを取り巻く現状の項目で、子どもたち自身におこなっている意識調査を掲載することは、子どもたちの将来のために行っている事業計画である以上、当事者の意見は最も重要だと思う。</p> <p>UNICEFのイノチェンティ研究所の「先進国における子どもの幸せ」のレポートの中では、親の就労状況などとともに、家庭の豊かさについて子どもに直接問いただすなど、子どもからの視点を掲載している。とくにレポートP37からの自己肯定感に関する項目では、 I feel like an outsider left out of things I feel awkward and out of place I feel lonely</p> <p>の3つの質問で、レポートP38のように、諸外国にくらべて日本の子どもたちが、ずば抜けて孤立感が強いことがしめされている。なお、この点については、調査時に使われた訳文「学校ではよそ者だ(またはのけ者にされている)と感じている」「学校は気後れがして居心地が悪い」「学校はいつも退屈だ」が不適切との意見も、日本国内からでたようだが、これも、子どもの人権を認め、その意見を求める諸外国と、日本の風土の違いのようにも感じられる。</p> <p>新潟市は、かつて、保育課で中学生に意見聴取を行い、専業主婦家庭で養育された児と保育園通園児の意識調査を行い、保育園通園児のほうが、より満足度が高く感じていたというデータをだしている。行政が、子どもの意見に耳を傾けるという先進的な姿勢を、ぜひ持ち続けてほしい。</p>	
20	25	<p>○子育てについて感じることを「楽しいかどうか」「不安かどうか」「負担かどうか」の3点から組み合わせているが、ここの結果がわかりにくい。せめて、最も多い回答をした人等が全体の何パーセントとなっているかを追加してはどうか。あるいは、施策提言につなげていくためのデータとするのであれば、楽しくない、不安、負担の三者がそろっている人が一番の課題なので、そういう回答をした人がどれだけいるのかを追加してはどうか。施策提言につなげることができるような結果の書き方にできないか。</p>	<p>○ご意見を勘案し、修正しました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パーセント表記を追記しました。 ・本項目は、明るい指標を入れるべきであるとの意見から記載したものであったため、マイナスの表記は記載しませんでした。(前回会議において意見聴取し、異議なし。)
21	26	<p>○21ページの満足度は、11ページの理想とする子どもの人数と実際の子どもの人数が違う理由として、大学教育に対する教育費にお金がかかるからとあるので、就学前児童保護者と小学生保護者の満足度が出されているが、大学のことがあるから、3人産みたいところを2人にしましょうとか、1人でいいという結果で出ているので、もしかしたら、保護者を小学生以上の中学生、高校生にも子育てに対しての満足度を調べてもいいのではないかと。産む前から大学のことを踏まえて、私は何人産みたいけれども何人にしますというふうにされている方がいるようなので、高校生の子どもを持つ保護者の満足度も調べてみていいのではないかと。</p>	<p>○調査終了後のため反映できず、前回案のままとしました。(前回会議において回答済み。)</p>
22	27	<p>○「(5) 主な子ども・子育て支援施策の取り組み状況」中、表に言及した説明文の本文を追加記載する。</p>	<p>○ご意見のとおり修正しました。</p>

前回素案 ページ数	意見 番号	委員意見概要	事務局対応
23	28	○「1目指すそれぞれの姿」中、「子どもは」、「保護者は」と続く前に本文説明文を追加する。	○ご意見のとおり修正しました。
23	29	○「子どもは」中、最終行「自分のまちに親しみや愛着を持ち、将来に夢や希望を描き、心豊かにいきいきと育っています。」の記載に大賛成。豊かなコミュニティ感覚sense of communityを育んでいることは、地域の高い凝集性(つながり・まとまりの良さ)を示すとともに、子ども期に獲得したこのような心の原風景を持ち続けることは、生きる力となって、うまくいかないときでも子どもを支え応援することになるから。因みにこのような豊かな体験を子ども期に根こそぎ奪ってしまうのが子ども虐待。子ども虐待の容認されない最大の理由である。	○評価いただいたので前回案のままとしました。
24	30	○「地域は」というところについて、こんなに多くの人や団体かかわっているのだということが初めて分かったようなところがあるので、これだけ具体的に入れたほうが、分かりやすくていい。	○ご意見を受けて、修正しました。 ・「地域は」「学び・育ちの施設は」には前回会議のように具体的な人や団体について記載し、その方法は、「学び・育ちの施設は」のほうにそろえました。
24	31	○「地域は」と、「学び育ちの施設は」というものを見比べたときに、「学び育ちの施設は」のほうがすっきりとしていて、伝えたいことが分かりやすく書いてあると思う。学び育ちの施設というのは、こういうところですよということが、少し小さい字で書いてあるのですけれども、これだけこのようにかかわっているのだなということも分かり、伝えたいことの趣旨もよく目に入ってくるので、このような形のほうが分かりやすい。ぱっと見たときに取り込みやすい。	
24	32	○「地域は」のところ、「地域の子どもは地域で育てる」という考えは、平成17年に新潟市は近隣の町村と大合併したときに、それまでそれぞれの行政機関で、目標は立てていたが、何か統一した子育てのいいキャッチフレーズがないかということで、提唱して、全員一致で、地域の子どもは地域で育てようということで、ずっと現在まで継続している。これについてはこの事業計画でも活かしていただきたい。	○評価いただいたので前回案のままとしました。
23-24	33	○23ページ以降、文脈から自明の場合「男女ともに」を削除する。	○ご意見(No.33-36)を勘案し、前回案のままとしました。 ・「両親ともに」という点に関しては、ひとり親家庭の場合を考慮し、「男女ともに」のままとしました。

前回素案 ページ数	意見 番号	委員意見概要	事務局対応
23-24	34	○(意見No.33を受けて)この保護者というのは、親だけではなくて、きとおじいちゃんとか、おばあちゃんとか、家庭にいる全大人のことを言うのかと思うが、真ん中の2番目の◎のところ、就労を希望する人というのは、恐らく母親のことを指し、父親が積極的にかかわるといのは、この文については、きっと両親のところを指しているのかと読み取りましたので、そこの「男女ともに」の部分为例えば、両親がしっかりと子どもと向き合っていますとか、「夫婦は」というように置き換えて、3番目のところはそのままでもいいのではないか。ここの「男女ともに」は、その家庭にいるすべての大人のことを指すと感じたので、そのままでもいいように思う。	
23-24	35	○(意見No.33を受けて)23ページ2番の2か所以降ということで、24ページ企業・事業主というところにもある。意見(No.33)では、自明の場合は削除とのことだが、個人的な意見としては、今の子ども・子育てを取り巻く現状を見ると、くどいようでもあえて残したほうがいいのかと思う。	
23-24	36	○(意見No.33を受けて)まだまだこの会議の視点を見ながら、そして子どもに関する話を聞いたときに、そうあるべきということは、頭の中にあっても、現実には、やはりまだまだ子どもは母親が見るものという意識の上で立って、そして男性の育児参加ということ自体が、母親が育てているものに参加するということになりますから、男性も育児に積極的にかかわるとい、やはり二人で育てるとい、家族で育てるといことが前提になっていたら、委員(No.33)がおっしゃるように自明のこととなってしまった場合であれば、これはお断りする必要なくなるし、「男女ともに」という言葉はいらなくなると思うが、今現在は、やはりそうになっているとはいいがたい状況で、資料の中にもあちこちに出てきているが、繰り返し強調して、「男女ともに」ということをつけ加えるべき。	
25	37	○「基本理念の考え方」の見出しを削除する。	○ご意見のとおり修正しました。
25	38	○基本理念のところは、子どもと家庭と地域の三つの単語のところをもう少しフォントを大きくして、子ども、家庭、地域を目に飛び込みやすい形にすると、「・」でも「と」でもどちらでもいいのかと感じる。	○ご意見のとおり修正しました。
25	39	○(No.38関連)もう一つの見方として、「・」と「と」の違い。「と」だと、子どもと家庭と地域というものがずらずらと並んでしまっていて、それこそ見ただけでひとまとまりみたいになってしまう恐れがある。それを「・」にすることによって、子ども・家庭・地域というものが、それぞれ際立つので、フォントの問題は別にしても、「と」というものと「・」を比較すると、こちらのほうが断然いい。	

前回素案 ページ数	意見 番号	委員意見概要	事務局対応
29, 30	40	○29ページのイメージ図や30ページの体系図は、例えば3頁「(4)計画の位置づけ」に続いて「(5)計画の体系」のような形でもっと前にもってきたほうが読む人の理解が深まるのではないかと。または、第2章の先頭でもいいのではないかと。	○ご意見を勘案し、修正しました。 ・体系図を2章の先頭に移動し、それにもなう修正をしました。
29	41	○イメージ図の「地域」中、「●共助・近助を拡大・強化し」を「●互助・近助を拡大・強化し」のほうが適切か。共助は年金、介護保険制度のように保険料を拠出して支えあう公的制度的印象が強く、自発的な取り組みは互助が用いられる場合が多い。	○ご意見のとおり修正しました。 ・ほかの箇所についても、同趣旨の箇所は修正しました。
52	42	○(1)健診に、乳児健診は1ヶ月健診のことと思うが、股関節健診は入れないのか。	○乳児健診に、股関節健診も含むものとして記載しています。
53	43	○こんにちわ赤ちゃん事業について、新潟市は母子保健における訪問指導と連携しながら切れ目のない訪問支援を行っているという話だった。そういった内容を「これまでの取り組みと成果」に記載し、乳児家庭に対して漏れのない訪問を行っていることを記載してはどうかか。	○ご意見のとおり修正しました。
60	44	○子どもを育てる第一義は両親にある以上、子どもに子育てとは何かを教える第一義も両親(祖父母)にある。行政的には、祖父母が子育てに参加できる機会を創出し、親族が両親を支援する事で、産みたい数の子どもを産める環境を整えるべきである。	○ご意見を勘案し、修正しました。
67	45	○けんこう広場ROSAについては、費用対効果の観点から、本計画に載せる事に反対する。	○ご意見を勘案し、修正しました。
70-71	46	○理想とする子どもの数を産めない理由のアンケート結果P11から、大学を含めた教育費の支援が急務である。教育委員会はこれに対して、どう考えて、この計画では、どう反映するのか。意見として、3大原因である、大学、高校、幼児保育・教育の両親がお金が掛からない仕組みを31年までに調査・検討・実施を望む。71ページ主な取り組みに上記項目の記入、最低でも調査・検討を記載し、全庁を挙げて、理想とする子どもの数を産める環境整備を求める。	○本計画には、大学教育費のことまでは記載いたしません。新しい教育ビジョンにおいて、高校、大学等の奨学金制度の充実に取り組んでいくことで検討しています。
79	47	○取り組みの方向性で、子育てや少子化対策に前向きな企業を行政が表彰・支援する更なる制度制定を求める。	○ご意見を勘案し、修正しました。
82	48	○新潟市児童虐待防止対策協議会の運営とあるが、これは「新潟市要保護児童対策地域協議会」のことと理解してよいか。そうであれば、文言をそろえた方がよい。違うのであれば、説明を加えた方がよい。	○ご意見のとおり修正しました。 ・文言をそろえました。

前回素案 ページ数	意見 番号	委員意見概要	事務局対応
90	49	○(2)において老朽化施設の改築・改修と小規模化の推進を記載していることと、新しい乳児院も小規模で設置していると聞いていることから、(1)にもそのことを記載したほうが良いと思われる。乳児院を設置することは、評価できる反面、施設養護から家庭養護が言われている今日、家庭支援専門相談員と心理担当職員の配置だけでは不十分。乳幼児期の子育てを支えるひとつの拠点としての乳児院として、入所している子どもの養育を確保し家庭に近い状況で養育することと、地域資源として活用することを踏まえての設置であるべき。	○ご意見のとおり、修正しました。
87,90	50	○社会的養護ということで、「“社会的養護”ってな～に？」とコラムのほうに書いてある。社会的養護の施設の中に、児童養護施設、乳児院、児童自立支援施設などがあるが、この「など」の中に母子生活支援施設も入っているかと思うが、母子生活支援施設は社会的養護施設の中でも、母と子が唯一一緒に生活して、家族の再統合する施設として唯一の施設ですので、ぜひ90ページの主な取組みの中に、母子生活支援施設も入れていただきたい。	○ご意見のとおり、修正しました。
91	51	○平成31年度成果指標(数字)設定の理由・根拠の記載は不要か。	○会議において説明を行い、記載自体は前回のままとしました。(前回会議にて回答)
-	52	○理念に掲げた、「地域社会の活力」の為に、「希望する人数の子どもを安心して産み育て」が出来る環境の整備が急務である。その為の施策が、他課に跨ると、急激にトーンダウンしているが、新潟市の未来への浮沈を掛けた計画であり、担当課のみならず、関係各課の積極的な施策を引出し、反映することを求める。関係各課に対しては、新潟市の将来に関する重要な事案と認識し、積極的施策を本計画に反映されたい。	○庁内会議「新潟市少子化対策推進会議」において情報や認識の共有を図っております。(前回会議にて回答)
-	53	○今、子どもを取り巻くいろいろな問題の中で、最近、いろいろな場面で会議の中でも出てきますが、貧困というところが今、新潟ではどうなのか分からないが、全国的に問題になってきている。一番悲しいのは、学校を辞めなくてはいけないような状況の子どもたちも、全国の中にはいるということが起きていること。この計画がこの先続いていく中で、きっと可能性的には出てくるのだろうと思う。すべての子どもたちが幸せに過ごして暮らしていくということも大事なことで、家族も、経済的に大変だというときに、何か救いの手があるのかどうか。これが、施策中、どの部分に入っているのか。	○25ページ基本理念の下から二つ目の塊に記載しています。国の大綱を見ると雇用、教育、福祉、いずれか特定分野ということよりも、全体的に、総合的にやっていくことが必要ということなので、記載を入れるとしたら、基本理念の部分しかないという考えです。すべての人の学習支援であるとか、雇用環境であるといったものすべてということで、このような整理をさせていただいています。(前回会議にて回答)

前回素案 ページ数	意見 番号	委員意見概要	事務局対応
-	54	<p>○確かに学びたいという子が、学校を経済的な理由で辞めなければならぬということ、とても悲しいことだと思うし、そういう子にはぜひ手を差し伸べてあげたいと思うが、子どもが産まれる前から大学費用がかかるから産めないということについて、高学歴イコール幸せなのか、学校さえ行っていれば何とかなるのではないかという考えは、これからの時代、そうではない気がする。本当に学びたい人は学べばいいと思うし、それがなければいけない職業があれば、それはやはり努力してでも行かなければならないと思うけれども、大学へ行きました、では、あとあなたは成人したのだから、私たちは知らないよと言われたときに、ニュースでも、賢い子たちが自分の目標が見つからず・・・という話がある。それは高学歴イコール幸せではないことだろう。もしかしたら、もっと違う道があったのではないかと思うとやはり親も、周りの人間も、これから高学歴イコール幸せではない、もっと多様な考え方が必要だと思う。ここですぐどうにかなる問題ではないが、私たちはそのように視点を変えていかなければならないのではないかと感じる。</p>	<p>○ご意見(No54-61)を勘案し、修正しました。</p>
-	55	<p>○子どもの貧困に関連して、小中高の教員と話す機会があるが、子どもの貧困というものは、今、非常に重大な問題である。高校の教育に関係している方の発言で、そう学力が高くない学校等で、小学校低学年並みの学力しかないという生徒がいて、その程度の実力で、社会に出たら大変なので、関係する教員が補講をやりたいという発想を持つわけだが、しかし、それができない。なぜできないかと言うと、高校生なので、アルバイトがある。アルバイトという表現であるが、実際には、一家の生計を営む主たる役割を果たしている。つまり、その方が補講を受けることによってアルバイトに行かなければ、一家の生計が成り立たない。こんな現状がある。子どもの貧困の問題というのは重大で、今、私が話題にした学生、生徒が、貧困ということがなければ、実力は当然、備わっているだろうということが想定されるので、やはり貧困という問題は、年齢の少ない段階から対策を打っていかないと、まさに負のスパイラルの繰り返しになるので、私は、非常に大きい課題だと思う。事務局から、基本理念のところを取り上げるしかないという話だったので、そのページでよいが、この問題は幸せな子どもたちの将来という観点からも非常に大事なことで、ぜひ単に文言を増やすだけではなくて、質的な面で何か大きく効果の発揮できるような内容を、基本理念等に盛ってほしいということを現実の問題から判断すると要望したい。</p>	
-	56	<p>○働く現場では、医療関係にしましても、介護職員同士の結婚では、子どもは育てられないと言われている。なぜ育てられないかというと、賃金が低いから。二人でお互いが介護職員として働いても、例えば、生活保護を受けられている人と同等くらいの方もいらっしゃる。働き方にもよるが、基本的には、私たちがいろいろな会議で言うのは、お互いフルで働いても、子どもは育てられない、厳しい状態だということで、6、7年くらい前に比べれば、今、少しはよくなっているが、一生懸命働いても、それが貧困という現状があるということも、ここで皆さまにお知らせしたい。</p>	

前回素案 ページ数	意見 番号	委員意見概要	事務局対応
-	57	<p>○貧困ということが、先ほどから話の出ている、実は、子どもを産むときに、自分がその子を育てられるかどうかという覚悟の中で、皆さま、お子さんを作られている中で、大学も負担が大きいから受けないとか、今、育てている子どもが実際に大きな負担を生んでいると。これ以上の負担には耐えられないということで、産めない。これも一つの貧困なのだと思う。一方で、一義的な責任を親が持つとしっかりと明記されているとおり、子どもを産むためには、自らの経済を、子どもを育てられるレベルまで上げなければいけないということが課せられているという現実。こここのところで、結局、その結果、生まれた子どもにとって、親の経済状況が教育に影響するという連鎖。これは、今のお話の中から三つ見えてきたのだが、一つの考え方として、子どもが教育を受けるということについて、親の経済力は関係ない。どういうやり方をしていくかということとは、確かに大きな問題かもしれないが、方向性を検討していく中で、極力親の経済が子どもの教育に影響しない方向に、今後、5年間かけて、いろいろな方法を考えていくべきではないかというレベルのところであれば、こういった計画の中に、方向性として示すことによって、皆さまの思いを入れることができるような気がする。直接貧困のある方をどうやって助けましょうと、ここに入れるのも難しい問題であるし、大学でお金がかかるものをゼロにしましょうと言っても、これもまたここに書くのは難しい問題であるから、ただわれわれは審議する側として、そういうことについて、真摯に行政サイドが考えていくべきであるという方向づけはいかがか。</p>	
-	58	<p>○「大学教育に対する教育費にお金がかかるから」という意識自体がおかしいのではないかと思う。先ほども意見があったが、高学歴イコール幸福なのかということも常日ごろから感じているところだった。例えば、中学校を卒業すると、ほぼ全員が高校へ行く。中学校の指導がそのような方向で指導している。高校に進学して、ぎりぎり合格して、でも5月くらいから中退、退学という数字がどんどん伸びていっている現状がある。新潟市は、専門学校に進学率が全国でも非常に高いということも含んで、高校が終わって就職する、仕事をするという意識が、ほとんどなくなっている。どこの上級学校に行って、それからゆっくりどういう仕事をしようか考えるというような風潮がどんどん広がってきているわけだが、そういうことが中学、高校、社会でも容認している状況自体がすごく不自然な、またこういう意識を醸成する。子どもを持った以上、大学まで行かせなければいけないみたいな雰囲気を作り上げている。そして、この事業計画そのものも、やはりそういうことを意識しながら作っていくという全体を見たときに、そういう感じがしている。</p>	

前回素案 ページ数	意見 番号	委員意見概要	事務局対応
-	59	<p>○私は、自分の子育てに関しては、大学を出たとしても、その大学に入ることに限っては、すばらしいと。でも、その大学を出てきて、いかに社会に貢献したか。そこで評価が発生する。私は、就職してきた人が××大学出ですけれども言ってもそれがどうしたのと思う。それを踏まえて、あなたはこれから就職先でどれだけ貢献しますか。貢献した後に、ああそれはすばらしいですねと。そこで初めてその大学の評価がありますということを自分の子どもに言う。どこの何になりたいのか聞いて、分からないのだったら、ひとまず働いてもらおうかと、働いてもらって、自分のやりたいことが見えてきたら、自分でそこからがんばればよい。がんばらないのにお金はかけられないというように、私は子育てをそのようにしている。だから、あの人は××大学出ですねと。よく就職すると、××大学4年制を出たのですってと言うけれども、それがどうしたのと思う。その後には評価がついてくるのでしよう。その名前を汚すのも、その大学の名前を世間にいい大学だと言わせるのもあなた自身ですということで、大学教育というのは、みんなそれはいい大学を出て、いいところに就職させたいという親心。産む前からの親心。現実に実力があるのに、あえて親にお金がないから、私はここで踏みとどまって働くという人に、大学教育費はそういう人に使ってほしい。何の目的もなく、ただ、みんなが行くから大学へ行くというのは、私の家庭に限ってはありませぬので、そういう人はすべて働いていただきますということで、そうやって育てていますから、その大学出身がいい、悪いということよりも、人間性の善し悪しだということで、そのように教育しています。周囲もやはりそういうところで、何が大事なのか。教育ではなくて、人間性。その知識をうまく活かせる人間を作ることが大事だと思うので、それはみんなすべからず子育てをしている人には、それを知っていただきたい。</p>	
-	60	<p>○11ページのグラフは、そのままアンケートの結果を表しているグラフだと思う。大学がすべてでないという話があったので、25ページ下から2つめの段落の3行目のところは、「子どもを安心して産み育てられ、そして未来の社会を創り、担う存在であるすべての子ども」という表現があるが、子ども一人ひとりにいろいろな自己実現の図り方があるのだというようなニュアンスを、もし、つけ加えるとすれば、産み育てられの次に社会のことを述べているが、その前に一言、「自己実現を図り」と入れ、そして未来の社会を創りというようにすると、皆さまが言われているような部分が反映できるかと思う。</p>	
-	61	<p>○「その将来が貧困など生まれ育った環境によって左右されることなく」という部分が、文書表現上、貧困を認めているように取ることができるかということが気になるので、もう少し表現の仕方を変えたほうがよい。</p>	